

書評 張伯偉著『域外漢籍入門』について

川邊 雄大

本書（中国語）は、南京大学域外漢籍研究所（以下、「同研究所」と略称する）の所長である張伯偉氏によって、中国の大学院生が「域外漢籍」を研究するための入門書として書かれたものである。

同研究所は二〇〇〇年二月に設立され、これまでに国際シンポジウムをたびたび開催し、二〇〇七年には『域外漢籍研究叢書』の初輯五冊、二〇一一年には第二輯五冊を刊行したほか、年刊雑誌『域外漢籍研究集刊』を既に九輯まで刊行している。評者は二〇〇六年九月、浙江工商大学と本学21世紀COEプログラムの共催による国際シンポジウム「書籍之路ブックロード与文化交流」に参加後、同研究所を訪問する機会を持ったが、その資料室には同研究所の所員が日本や台湾等で買い求めた関連資料が、天井にまで所狭しと配架されていたのが印象的であった。

その時の訪問記「南京・上海調査報告^①」をまとめた際に、評者は同研究所の「設立趣旨」（岡田千穂抄訳）を掲載した。同研究所の研究方針や内容を知る上で有用だと思われるので、ここに全文を再録しよう。

【設立趣旨】中国の歴史上において、漢字文化はかつての周辺国家及び民族に多大な影響を及ぼした。現在漢字を用いて文字を書く国家や地域を「漢文化圏」と呼んでいるが、中国以外のそれに準ずる国家や地域、特に日本・朝鮮・ベ

トナムなどを「域外漢文化圏」と呼んでいる。域外漢文化圏の重要な要素である域外漢籍とは、域外人士が漢字を用いて政治・道徳・歴史・宗教・言語・文学・芸術などに関するものを記した著作物のことであり、中国国内ではすでに散佚してしまった文献も含んでいる。域外漢籍研究の重要性はすでに国際学術界に於いて関心を引き起こしていたものの、中国国内にはその領域に関する専門研究機関が設けられておらず、系統的に且つ持続性を持って学術研究を展開するに難しい部分があった。これらの状況を鑑みて、南京大学は二〇〇〇年二月「域外漢籍研究所」を設立させ、この新興学科の発展を推進することにした。

本研究所は、中国国外の漢籍、特に日本・韓国・ベトナムに所蔵されている漢籍を中心としながら漢文化の総体研究に尽力を尽くしている。グローバル化の呼び声が日に日に高まる今日、これに対する研究は東アジアの文化建設に対して多大な意義を持ち、異なる国家・異なる民族の隔たりを学術という名の絆で取り除き、相互理解を深めている。

この設立趣旨や前掲の刊行書籍などからは、同研究所の域外漢籍研究が、「域外」という他者からの視点を導入することにより、中国人にとつての中国学を相対化するとともに、域外における中国学の受容・発展を中国の視点から評価するといふ、明確な目的や方法が感じ取れる。

さらに近年では、東アジア各地でこうした「超越」的な研究が活潑になっており、東アジア文化圏における漢籍・漢学というとらえ方や、東アジア各地で布教した欧米人宣教師の資料を使用した研究などが行われており、南京大学の域外漢籍研究所のほかにも、一九九六年に北京外国語大学に海外漢学研究中心（現在は中国海外漢学研究中心に改称）が、二〇〇一年に台湾・国立雲林科技大学に漢学資料整理研究所（現在は漢学応用研究所に改称）が、二〇〇六年に台湾師範大学に国際漢学研究所（二〇一一年に東亜文学暨旦發展学系と合併し、東亜学系に改編）が設置されて、それぞれ注目すべき研究活動を展開している。

さて、本書について見ていきたい。

本書は全三章から構成されており、最後に参考文献およびあとがきが附されている。

第一章「導言」では、域外漢籍の定義・研究範囲・研究史・意義・研究方法について述べている。研究史の中で、一九八〇年代に陳慶浩（フランス国家科学院）によって域外漢文小説の整理と研究が提唱され、一九八六年に台湾聯合報国文学文献館組織によって第一回「中国域外漢籍国際学術会議」が開催され、一九九五年まで十回に互って行われたとの記述があるように、同研究所が設置される以前すなわち八〇年代からすでに域外漢籍研究の動きがあった点に注目すべきである。

第二章「総説」では、まず工具書について紹介している。その中で目録を紹介するにあたっては、域外を朝鮮・日本・越南および琉球の四地域に区分している。目録の朝鮮・韓国部分では、韓国人編纂と日本人編纂に分類し、日本部分では、日本人編纂と中国人編纂に分類して排列している。また琉球・ベトナム部分を見ると日本人が編纂した目録が多数を占めており、参考文献中にも日本人研究者の著作が多数掲載されている。このように域外漢籍研究を行うにあたっては、日本漢学・漢文学だけでなく、日本の研究者による中国学・東洋史・朝鮮史等の各分野の研究を参考にしていることが分かる。

つづいて、年譜・辞典・ウェブサイトを紹介しているほか、資料集（経部・史部・子部・集部）、雑誌（中国語・日本語）・会議論文集を紹介している。

第三章「実例」では、「考証」と題して真偽・作者・校勘・補遺について述べ、つぎに「専書」と題して仏教・儒学を取り上げ、「專題」と題して目録学・史学・文学を掲げている。そして最後に「総合」として書籍交流・文化意象・唱和筆談を話題にしている。

「実例」は本書の大分部を占めており、中国の中国文学研究者の視点からみた域外漢籍への興味関心を端的に示しており、まことに興味深い。張伯偉氏の元来の研究分野は詩学と聞き及んでいるが、域外漢籍に関する主だった編著としては『朝鮮時代書目叢刊』³や『朝鮮時代女性詩文集全編』⁴があり、本書においても朝鮮の儒学と漢詩文に関する言及が多く、本

書のかなりの部分を占めている。この背景には、韓国から影印刊行されている『韓国詩文叢書』などの歴大な文集が有力な資料になったことも想起される。

「実例」のうち、全面的に日本の事例が取り挙げられているのが、第三章の「仏教」と「文学」である。

「仏教」では、宋代にまとめられた禅宗文献である恵洪『注石門文字禪』に注釈を加えた唯一のものである廓門貫徹（？一七三〇）『注石門文字禪』三十巻を代表的な著作として紹介している。そして、貫徹の交流関係に着目し、独庵玄光からの影響について述べている。さらに日本人禅僧が儒家經典に注釈を附すようになった理由について、日本に臨済・曹洞の二系統の禅宗が入ってきた経緯から説き起こして、五山僧侶が禅以外に宋学とくに朱子学を学ぶようになった当時の日中の文化的な背景が概説されている。江戸時代に入ると、江戸幕府の学問振興政策により、各宗派が学寮を設置するようになった一方で、禅林内部の抗争や幕府の官学である儒学の仏教に対する排斥などの中で、独庵玄光や貫徹のような傑出した人物が出た点に注目している。日本漢学の担い手は、中世では博士家や僧侶であったが、近世では彼等に替わって儒者が中心となったため、従来の日本漢学史・儒学史・漢文学史では、儒者に対象の重きが置かれることが多いが、張伯偉氏のように少し僧侶への配慮が必要なのではないかと思う。

著者が多くの紙面を朝鮮関係に割く中で、仏教に関して日本の事例を取り上げているのは、僧侶によって儒学（宋学）が日本に導入され受容が進められたという点が他国と比べて特徴的であり、これまでの研究蓄積も厚いことに起因するものであろう。このほかにも僧侶は宗教はもとより、学問のみならず中国文化の導入や外交にも大きな役割を持っていたという点も、他国と大きく異なる点である。なお、「仏教」の次項「儒学」では、日本儒学は全く取り扱われておらず、李恆老（一七九二〜一八六八）の文集である『華西集』を例として、朝鮮儒学のみを取り上げている。

「文学」では、日本漢詩について述べており、池田胤（四郎次郎）等編纂の『日本詩話叢書』を代表例として紹介している。日本詩話の特徴について、詩格類についての内容が多いことや、日本では科挙制度が定着しなかったため、作詩が初学

者による漢語・漢文法の習得のための手段となったと評していることは、日本漢詩のみならず日本の漢字学習に対する評価としても興味深い。また、宋詩が五山僧の詩作に与えた影響について述べているだけでなく、江戸時代に来日した朝鮮通信使が、日本人の漢詩をどのように評価したかといった問題も、東アジア圏における華夷意識などとも関聯して特筆すべきである。

このように、本書は筆者自身も述べているとおり、日中文化交流史の視点から日本人（主に僧侶・儒者）による儒学や漢詩文の受容とその変遷について述べている点や、日中のみならず中朝・日朝といった視点から研究を進めている点特徴であるといえる。

ただし、上記のような日本の事例紹介はあるものの、大学院生向けの入門書としては、日本漢学に関して言えば、些か不十分な点も感じる。先に刊行された倉石武四郎講義『本邦における支那学の発達』⁶⁾が、室町時代における僧侶による漢学の受容、近世における漢学・唐話学（中国語学）・白話文学等について詳述しているのを、是非参照してほしいものだ。本書が出版された二〇一二年当時、まだ中国語訳が出版されていなかったが、二〇一三年に中華書局から『日本中国学之発展』と改題して出版されており、中国人研究者や大学院生の目にも触れやすくなっている。附言すれば、倉石講義録が参考になっている日本漢学・漢文学関係の代表的な研究書（例えば石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』（一九四〇）など）を中国語訳して紹介していくことも有益ではないだろうか。⁶⁾

このほか、第二章「総説」で「資料集」として触れられている『原本老乞大』、『朴通事諺解』をはじめとする朝鮮時代の中国語テキストや、第三章「実例」の「書籍交流」で言及されている「燕行録」など朝鮮人の中国滞在日記は、近世期における日本と朝鮮の対外政策の違いと、それに起因する諸問題が浮かび上がってくる点で興味深く感じた。筆者も述べているように、同時期の日本は朝貢体制に組込まれておらず、鎖国政策を採っていたため、朝貢使節を北京に派遣する必要がないため、中国に渡航した日本人の日記というものが残っていない。本書では述べられていないが、当時の日本人と朝鮮人が学ん

だ中国語が異なっていた点も無視できない。朝鮮の朝貢使節の通訳が用いた中国語（北方系）と、長崎での貿易の通訳が主体である唐通事を用いる中国語（南方系）は、言語系統が異なるだけでなく、使用する状況も異なるため、その語学テキストや教育内容にも大きな相違が生じていたのである。日本と朝鮮がそれぞれ中国と政治的・文化的・地理的いかなる関係にあり、それが文学・語学の分野で実際にどのような相違としてあらわれたかという認識のもとに、更なる比較研究が望まれる領域であろう。

このように見てくると、日本が朝鮮・ベトナムなどと異なり、朝貢体制に組込まれず、科挙制度も採用をしなかったことが、国家のありかたのみならず、日本漢学をはじめとする学問形成に大きな影響を与えたことをあらためて実感できる。その意味では、域外漢籍研究という視点から日本漢学を見るということには一定の有効性があると思われる。「域外」という言葉が持ついささか中国大陸中心の意味合いに抵抗を感じるならば、これを「東アジア」という言葉に置き換えてもよいだろう。東アジアという視点から日本漢学を他地域の学問（漢学）と比較しつつ、日本を相対化してみることは、我々にとっても実りある展開が期待できるのでないだろうか。

それとともに、日本側としては前述した既存の代表的な研究書はもとより、日本国内の新資料発掘とその紹介につとめて、日本漢学を内外に広く発信し、東アジア各地の超域的な研究にしっかりと応えていく必要があると感じた次第である。

註

(1) 『双松通訊』No.7（二松学舎大学21世紀COEプログラム、二〇〇七年二月）、九頁。町泉寿郎・川邊雄大共著。

(2) 東アジアの漢文小説研究は陳慶浩のほか、王国良（台北大学）・王三慶（成功大学）・陳益源（同）など、主に台湾等で進められてきたがその後、中国大陸では孫遜（上海師範大学）・孫虎堂（山東理工大学）等によって、韓国では崔溶澈（高麗大学校）・趙冬梅（同）等によって研究が行われ、朝鮮・ベトナムの漢文小説集などが刊行された。

日本国内でもこうした影響を受けて、二〇〇〇年に日本漢文小説研究会（内山知也筑波大学名誉教授主宰）が結成され、「日本漢文小説史は日本文学史上の空白部分である」として、主に日本漢文小説の研究を進めてきた。二〇〇三年には、台湾から『日本漢文小説叢刊』

(王三慶・莊雅州・陳慶浩・内山知也主編、台湾学生書局)が、二〇〇五年には日本漢文小説研究会による『日本漢文小説の世界―紹介と研究』(白帝社)が刊行された。

(3) 中華書局、二〇〇四年。

(4) 鳳凰出版社、二〇一一年。

(5) 汲古書院、二〇〇七年。

本書は、倉石が東京帝国大学文学部の支那哲学支那文学科で昭和二十一年(一九四六)度に行った「特殊講義」の講義録で、全十三章からなっている。

(6) 倉石講義録は、このほか内藤虎次郎(湖南)『近世文学史論』(一九七七年)、岡田正之『日本漢文学史』(一九二九年)・安井小太郎『日本儒学史』(一九三九年)・岡井慎吾『日本漢字学史』(一九三四年)・牧野謙次郎『日本漢学史』(一九三八年)・大江文城『本邦儒学史論攷』(一九四四年)などに依拠するところが多い。

張伯偉著『域外漢籍入門』復旦大学出版社、二〇一二年、iii + 三九四 + 二頁。

